

[04\_11] 図書館情報 : 九州大学附属図書館月報 :  
4(11)

<https://doi.org/10.15017/18017>

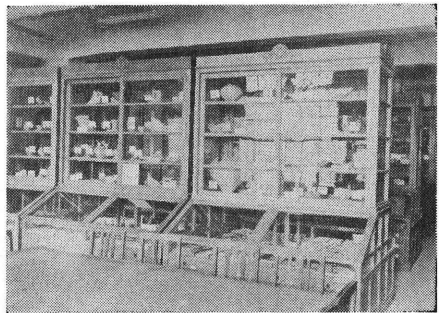
---

出版情報 : 図書館情報. 4 (11), pp.57-62, 1968-11-25. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :

## 玉泉館——九大教養部歴史資料展示室

西尾陽太郎

(1) 創設事情：当館の竣工は昭和5年であるが、その起源はもと福岡高等学校開設の大正11年に遡る。同校開設と同時に着任した玉泉大梁先生には、歴史学教授に対して新しい抱負があって、従来の口より耳への授業に加えるに、学生自身の資料の検討による、自発的な歴史研究をもってしようと志された。爾来先生はあらゆる余暇を利用し、学生の有志と共に、営々として考古学資料、古文書などの歴史学資料の蒐集を続け



玉泉館

られた結果、大正14年には、旧福高本館二階の一室にあった歴史地理資料室も手狭となったので、独立した資料室の建造を文部省に要求し、その結果、昭和5年3月に完成したのが現在の玉泉館である。

(2) 玉泉館の規模と設備：玉泉館はコンクリート平屋建の建造物で、面積は42.56坪。東南西三面の窓は鉄柵金網張。内部窓下の部分は四面ともに陳列台及び古文書収蔵棚となっており、収蔵棚には資料整理用箱が設備されている。中央には6尺四方、高さ8尺の陳列棚9個を3列に並列し、主として考古学資料を陳列している。また、その西側空間には、大机2脚、椅子20脚を備え、研究用に提供している。以上のほか書棚2個には関係図書を収蔵し、備品原簿および古文書目録を収めている。なお2年前より、図書館所属の事務員1名を専属的に配置し、整理事務、および閲覧事務に従事させている。資料購入予算も昨年度から年間約20万円の配分を受けるようになった。以上は本館関係の設備であるが、この他、昭和14年、本館に接属した東部に新館35坪が新設され、古文書陳列及び研究・集会用に充てられた。しかしこの新館は教養部開設に伴う学生数増加等による、学内施設流用の必要のため、現在その本来の目的のために使用されていないのは遺憾である。

(3) 玉泉館資料の内容：資料は大別して考古学資料約6000点と古文書約4000点を含む。考古学資

料は、第1門石器、第2門弥生式土器及び埴輪、第3門祝部式土器、第4門瓦、第5門瓷器、第6門貨幣、第7門鏡、第8門金環及び玉類、第9門武具及び馬具、第10門アイヌ系土器、その他門外に分類され、時代別に配列されている。以上主として九州地域の資料が多いが、そのほか満州、琉球、朝鮮、南洋にも及んでいる。古文書関係資料は糸島郡の庄屋文書三苫家文書3400点を主体とするが、他に黒田氏関係文書や筑前各郡地図類などをも含み、時代は近世初頭より明治初年に至る。三苫文書は政治・法制・土地制度・度量衡・貨幣・交通・測量・農業・商業・財政・社会・宗教・教育・売買・貸借・質入・下作・地券・地図などに分類され得る内容をもつもので、本館におけるまとまった資料である。なお最近に至って本館資料充実のための努力を払いつつあるが、限られた予算内での、まとまった資料の入手は困難であり、それを補う方法として複写資料の蒐集を試みつつある。最近入手の資料としては、新宮敬之関係資料、名家書翰集（鈴木重胤・中島広足・柴野栗山・香川景樹・杉田玄白・菅茶山・太宰春台・本居大平・頼杏坪・佐藤一斎）、前原一誠関係資料などがあり、複写資料としては、九大図書館所蔵の貴重本黒田長溥公伝（草稿本）、内田良平関係資料などがある。

(4) 今後の計画：教養部開始当時、殊に玉泉先生の去られたのちしばらくは、その資料保管維持のため、当館は閉鎖的な傾向が強かったが、ここ数年来開放の方針に切りかえ、現在では毎日、一定時間、開放して学生の自由閲覧を行い、また外部の希望者に対しても、研究の便宜を計っている。また数年のちには図書館の改築の計画があり、本館もその一環としてその新館への移転について考慮中である。そしてその際にはスペースも倍加されるので、設備、資料ともに充実したものにし、玉泉館創設当時の目的を十二分に生かしたいと考えている。

(にしお・ようたろう：教養部教授；国史学)

◇

◇

◇

◇

◇

◇

## ◆ 会 議

### 日本医学図書館協会第39次総会

〈とき：昭和43年11月7～9日 ところ：東京慈恵会医科大学附属図書館〉

本協会は、本会年次としては、今年39次であるが既報の通り（本誌3巻11号）、昨年之久留米総会で40周年を迎えているが、年々盛会発展の道を辿り、本年も準会員としては、九州地区すいせんで、九州歯大が入会承認された。本年は東京総会という地の利もあって、出席会員数も今までの記録を破り200名近くあった。今回もまた、協会事業としては、医学関係書誌の出版、館員の再研修の続行が決定された。国際的な問題としては、来年5月、アムステルダム（オランダ）で第3回世界医

学図書館会議がもたれるが、その連絡委員として日本からは、裏田武夫氏（日本医学図書館協会中央事務局長）の出席が予定されている。出席者は館長、司書を問わず、申込期限は今年中である。今回は司書会議、総会（6議題）を含めて、大きな焦点となったのは、43年度予算（中央事務局）の審議とテレックスの導入問題であった。現在のテレックス設置館は慶応、東京医大、東京女医大の3館（いずれも私立系）である。医学分野では、近い将来、メドラス導入体制にも直接大きくつながる問題だけに、今後の新設と活用が、医学図書館界は申すまでもないが、その他の国公私大図書館界でも、注目と期待の焦点となるであろう。最後に館員の研修について、来年以降3カ年計画で、初年度決定したのは、西日本地区では、徳島大学医学部、東日本地区では、札幌医大であった。44年度の当番館は和歌山県立医大附属図書館に決定した。

## ◆ 研 修

### 福岡県大学図書館協議会福岡地区研究会（第3回）

〈とき：昭和43年10月16日 ところ：九州大学教養部第3会議室〉 参加者：11館19名

今回は研究課題①「分類表の検討—その2」として、National Library of Medicine Classification (NLMC) について本学医学部分館目録掛福永寿夫氏から発表があった。次回は研究課題②「大学図書館の業務分析」について討議される予定である。

### 学内図書掛長会議（昭和43年度第3～4回）

○第3回〈とき：昭和43年10月18日 ところ：本館新刊雑誌室 出席者：26名〉

協議事項：外国雑誌契約について

この契約については、係数、価格の統一、欠号補充、前金払、郵送料など多くの問題をかかえているが、今回は、係数のひき下げに対する洋書輸入業者の大学への要望事項、①前金払の時期、すなわち、5月中に第1回の手続きをとること、②後金払を年3回ぐらいに分けて支払うこと、③郵送料の支払いを認めること、などについて、検討・協議した。掛長会議としては、②はすでに実行しているので問題ではない。①、③については、外国雑誌の価格、または郵送料の確認方法が可能であれば支払の請求に応ずることなどを決め、事務局を通じて業者に回答することにした。しかし、もし、業者が係数きり下げに応じないときは、昭和45年度外国雑誌契約は、できるだけ、係数のひくい業者へのきり換え手続きをすることをあわせて申し合わせた。

○第4回〈とき：昭和43年11月5日 ところ：本館新刊雑誌室 出席者：25名〉

今回の報告事項としては、①事務系懇談会(全学)について、②日米大学図書館会議プログラム(案)について、③昭和43年度全国図書館大会について、④全学製本施設について、⑤外国雑誌契約、とくに係数について、⑥文献複写業務の現状について、などであった。③については、東京大学附属図書館、「図書館の窓」Vol. 7, No. 7, 1968 所載の“NPAC”を配布し説明、また、⑤の外国雑誌契約は、今後の問題点、納入延期について、および前金払と後金払との別係数などを検討するため、事務局と図書掛長との合同小委員会を設けることを申し合わせた。

### 大学図書館職員講習会（昭和43年度）

〈とき：昭和43年10月22日～25日(4日間) ところ：広島大学〉

参加校の範囲は中国、四国、九州の各大学、短大、工専で、総数約100名であった。

講義内容は、現在大学図書館において切実な問題である「整理作業の合理化、標準化の諸問題」を主たるテーマとして行われ、熱心な質疑応答もあり、極めて有意義な講習会であった。

なお、本学からは、附属図書館(長)、文学部(吉安)、理学部(三島)、医学部(福永)、教養部(田島)の諸君が出席した。

## 学内図書館のたより

### 図書館オリエンテーションの実施

—学部進学生のための—

<中央図書館>

図書館奉仕活動事業の一環として、昭和40年度から実施してきたカラーズライドによる学内の図書館利用案内も、今年で4年目を迎えることになる。各学部で行なわれる進学学生のオリエンテーションにタイアップして行なうわけだが、年々学部側の関心も高まって、学部のオリエンテーションとの連携もうまくいくようになった。特に今年度は、いままで比較的出席率の悪かった理・工学部進学学生の多数の関心をよんで盛況であった。

この図書館オリエンテーションは、カラーズライドの映写によるもので、所要時間は35分間、同時にオリエンテーションの素材として作成した「図書館利用案内」(20ページの冊子)を配布して、後々の利用の手引きとしているものである。開催実施は下記のとおりである。

第1回 10月23日 理学部(理学部大会議室)

第2回 10月24日 文・教育・法・経済学部(文・教育・法・経済学部大講義室)

第3回 10月26日 農学部(農学部4号館110番教室)

第4回 10月28日 工学部(工学部講堂)

実施効果を知るために、アンケート用紙を配布して調査を行なった。大変参考になったという感想が大多数であったが、なかには教養部に入学したときにこのような利用案内をして欲しかったという希望が多く、そのほか中央図書館に分散している各閲覧室(指定図書室・参考図書室・新刊雑誌室・一般閲覧室)のつながりを鮮明に理解するために、場面の連結する映画方式を希望する意見も多数みられた。

なお、例年になく出席率のよかったことは、たちまち利用面にもその影響が現れて、改めて図書館のP・Rの必要性を認識させられた。

## 報 告

### 読書推進の集い

毎年、恒例の読書週間が全国的にくり広げられる。福岡地区でも次のような日程で実施され、関係者多数の参加があった。読書週間とは、関係者が地区の人達に対して「皆さん、本を読みましょ」と訴える運動を本旨とするのだが、関係者としては計画のたちおくれで運動の具体策が決定されず、したがって関係者だけの集いとなった。つまり、「読書週間を実りあるものにするには、どうしたらよいか」という関係者を主体とした研究集会となった。来年は運動の具体策も検討され、広く市民に訴える方式が打ち出されることと思う。

日 時 11月27日(水) A.M. 10.30 ~ P.M. 3.00

場 所 福岡県文化会館講堂

主 催 福岡県図書館協会(公共:大学:学校:公民の各協議会)  
西日本図書館学会

催 物 シンポジウム(各協議会より)

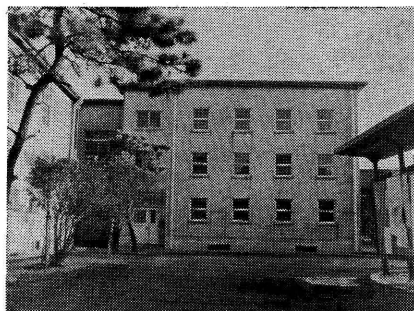
講演「読書と哲学」九州産業大学図書館副館長 菊池 租

参加者 各協議会関係者:市民代表 計約100名

## 学内図書館めぐり

### 教養部図書館の沿革 (その1)

中央図書館、医学部分館に続いて今回から教養部分館の歴史を記すことになった。当館は前記二館とは、その発生の母体も全く異なっており、機能も中央図書館と類似しているが、一方教養部という部局の中にあって更に個性的な面を要求されている。近年事務室を増築し、旧講堂を学生閲覧室に吸収したとはいえ、創立以来の建物の中で当時約35名の専任教官と600名たらずの生徒が対象であったのに比べ、約160名の専任教官と約4000名の学生、そして11万冊を超える大量の蔵書を抱えて、身動きすらできないのが創立50年の九州大学教養部図書館の姿である。



教養部図書館

そこで当館の現在建っている足場をその創設からふりかえてみることは、今日の姿を確認するのみでなく、将来進むべき方向をも映し出してくれるのではないかと考える次第である。ここで当館の歴史をおおよそ次の三つに分けて眺めてみたい。

第一期は大正11年4月の創立から昭和22年の学制改革に伴う九州大学への移行までの旧制福高時代、第二期はいわゆる分校時代、第三期は昭和34年から現在に至る教養部分館時代である。

#### 旧制福高時代

大正10年11月8日勅令第43号により学校が設立され、初代校長に秋吉音治氏が任命された。翌11年4月木造二階建の校舎が竣工し11日に第一回入学式が挙行された。生徒数は文科120名、理科80名、計200名、専任教官は14名であった。初代図書館長には武藤長平教授が任命された。同年7月鉄筋コンクリート二階建の書庫が工費12,183円をもって竣工、翌12年8月には講堂及び図書閲覧室がそれぞれ工費47,812円と16,527円とで竣工し、ここにはじめて図書館業務が開始されたのである。この年の図書購入費10,118円59銭、蔵書数は和書4,572冊、洋書2,698冊合計7,270冊であった。この数字から洋書が、かなり購入されていたことがうかがえる。因みに昭和43年3月末現在の当館の蔵書数は和書76,688冊、洋書30,935冊 計107,623冊である。

当時の木造校舎は、一昨年新校舎建築のためにとりこわされ、わずかに講堂が学生閲覧室として残っているのみである。その頃の学校の周辺はほとんど田圃ばかりで、正面から北へのびる道のまわりにまばらに人家が点在し、はるか遠方から学校を望見することができたという。前に玄海の荒波を臨み、後に背振の白雪をいただき、六本松・草ヶ江・鳥飼・田島などという附近の地名が示す通り、静かな田園の中で学問に青春の一時期を送った生徒達の中には、現在九大各学部及び教養部で研究に教育に活躍しておられる教官も多く、時折図書の頁の間にはさまれたまま忘れられている閲覧券に見覚えのある名前が丁寧に書きこまれているのを見て思わず微笑することがある。また、すでに定年を迎えられ勇退された教官も数人おられるということである。

旧制福岡高等学校では会計課を除く他の課(庶務・教務・生徒・図書)の課長はすべて教授が任命されていた。歴代図書課長の任期は次の通りである。

大正11. 4~12. 3 武藤 長平(漢文)	昭和 6. 9~17. 4 不破 美太郎(数学)
12. 4~13. 7 浅井 虎夫(漢文)	17. 5~21. 3 玉泉 大梁(国史)
13. 7~昭和2.10 浦瀬七太郎(英語)	21. 4~22. 3 野村 梅吉(独語)
昭和 2.11~ 3. 3 吉浦 友喜(英語)	22. 4~ 秋山六郎兵衛(独語)
3. 4~ 6. 9 白川 精一(独語)	

当時図書館は閉架式で、現在の開架閲覧室が学生閲覧室、雑誌コーナー及び出納台附近が教官閲覧室と事務室であった。図書の整理は、独特の分類法で0から9門まで三桁千区分であった。(分類表参照)この分類法がどのようにして作られたかははっきりしないが、そのころ和書の分類法の標準的なものといわれていた帝国図書館の八門分類法に項目が類似しているようである。この分類記号に、更に受入順による図書記号を加えたものが請求記号となり、それによって書架に排架されていたため、同一図書でも受入の時期がずれると離ればなれになっていた。

### 分類表

第0門	総記	〔帝国図書館〕
1	辞典・事典	1 神道・宗教
2	哲学・教育・宗教	2 哲学・教育
3	法制・経済	3 文学・語学
4	語学・文学	4 歴史・伝記・地誌紀行
5	歴史・伝記	5 国家・法律・政治・経済・社会・統計
6	理学・医学	6 数学・理学・医学
7	工学・農学	7 工学・兵事・美術・諸芸・産業
8	芸術・技術	8 事彙・叢書・随筆・雑書・雑誌・新聞紙
9	産業・交通	

目録については、最も特色のあるものとして洋書目録の国語による色分けであろう。英語は白、ドイツ語は赤、フランス語は青とそれぞれ色分けされたカードに記入がなされ、図書の背に貼るラベルも同様に色分けしたものを使っていた。

例えばドイツ語に翻訳されたシェークスピア全集は、分類記号は英文学であるが赤のカードに記入され、赤いラベルを貼られ、書架もドイツ語図書のグループで排架されていたのである。しかし、これら色分けされたカードもラベルも再分類の完了と共に今はない。

旧制福高は軍国主義華やかかなりし時代を経て、急転して敗戦をも経験している。昭和12年に図書監督官という制度がみられるが、これは当時の思想統制のあらわれなのであろうか。昭和20年8月まではマルキシズム・社会主義・農民運動などという主題の図書は閲禁図書として施錠戸棚の奥深く隠されていた。しかし急転して敗戦となるや今度は皇国、神道、ドイツ大帝国などが閲禁、或は破棄の憂目に遇っている。「新世界地理」の中の「満洲」という巻でさえも破棄されているのである。

### ◆人事異動

#### 附属図書館商議委員の異動

工学部選出の商議委員の任期満了に伴い、下記のとおり発令があった。

43. 11. 16 村上 正 (工学部) (野村孝文委員の後任)

#### 図書系職員の異動

43. 11. 1 大峯 末徳 文学部から学生部厚生課へ配置換

〃 井出 公東 医学部分館から文学部へ配置換

### 〇〇あとがき〇〇

毎年行われる毎日新聞社の全国読書世論調査によると、20才から29才の間のベスト10位の文学作品のうち、漱石がトップで芥川、鷗外、啄木、島崎、と故人で占められている。漱石は年齢層にかかわらずトップ。石坂、川端、武者小路、三島、松本、なども10位のうちにあるが、ともかく、この調査によれば、青年の心が依然として、明治大正期の作品に向かっていることを示している。ということは、現代の作品には心の糧はないということにもなる。古典というほどの古さではないが、ともかく古典かさもなくば漫画か、ということのようである。物質文明は国際なみのレベルにありながら、心の糧となると漫画か古典しかないということは、現代にある不幸な分裂症状を起させているとも言えよう。

異常なほどの急進物質文明に対応するだけの文学が生れなければ、青年はもとより日本人全体が、心の糧なき永遠の放浪者となるのではないだろうか。

都合により、第4巻12号(12月号)は休刊します。ご了承ください。

九州大学附属図書館月報「図書館情報」Vol. 4, No. 11. (通巻39号)

1968年11月25日発行・発行人 船越 惣兵衛

発行所 九州大学附属図書館・福岡市大字箱崎 3576・〒8112・電話代表 ㊟ 1101 内線 5301